

土間の通路、冬暖かく夏は涼しい地中熱利用の空調など、さまざまなエコロジー提案がある。「さらに、中医学（漢方医学）にある『気』の流れが良くなるような建築設計で、建設地の四万十川河口（左岸）の景観にもマッチした施設です」。

こうしたエコロジーな施設は、「当時の中村市というより、全国の公共施設を見渡してもほとんどなかったのではないのでしょうか」。そういう意味で「画期的」な施設である。運営は、JR四国の四万十の宿と同様に、JR四国の子会社である宇和島ステーション開発に依頼することにした。指定管理者制度を活用している。

「石黒先生は話していて気持ちいい人」

仕事を通じて受けた石黒氏の印象を、「今まで出会ったことがないタイプの人、話していて気持ちがいい人、しっかりとしたポリシーをもった人」と表現する。それまで仕事を依頼してきた設計・コンサルタントは、大きく2タイプあった。一つは発注者の意見・指示通りに仕事をするタイプ、そしてもう一つはプロである自分たち（設計・コンサル）に任せろというタイプだ。石黒氏は、そのどちらでもなかった。

「石黒先生は、発注者の意向を聞きながら、そこに専門知識を加味して私たちが理解できるように肉付けをしてくれました。今日でこそ、エコロジーは当たり前ですが、当時は言葉として知っていても、具体的にどう表現しつくり上げていけばいいのかわからない時代です。そんな中で石黒先生は、説明が本当に上手でした。四万十いやしの里事業は、中村市・JR四国グループ・ペス建築環境設計の三者が一体となり、知恵を出し合ってみんなでつくりあげたプロジェクトです」

公共施設の運営は、大半が赤字だといわれる。そんな中で「黒字にしようと頑張りました。今も黒字だとうかがっています。石黒先生には、将来のメンテナンスまで考えた提案をしていただきました。そんな提案があつてこそ、今日があると思っています」と感謝する。

「都市公園内に医療施設はダメ！」

石黒氏の参加で計画は軌道に乗っていったが、実現までに克服すべき悩ましい課題がいくつもあった。

まずは、市議会の反対である。市としては大型の公共事業であり、当然、事業費もかかる。大金をかけて建設しても、「果たして市外から人がくるのか？」との反対の声が根強かった。地元の旅館からも反対の声が上がる。

建設地の問題もあった。計画地は都市公園であり、公園内に設置できる施設は限られている。計画地の近くにはオートキャンプ場があり、入浴施設や食堂、宿泊施設は可能だが、医療施設である中医学研究所は、都市公園法で設置が認められていなかった。国土交通省と高知県から猛反対を受ける。

「これらの調整は本当に苦労しました。罵倒されるようなこともありました。これ以外にも費用負担に関するJR四国との交渉、用地買収しようにも地権者がブラジル人だったり、いろいろあったことを思い出します」

「信念・ポリシーを日本に世界に」

紆余曲折を経て、四万十いやしの里事業は2002年に完了し開業した。開業からちょうど20年。良い思い出